

子どもの自分の家庭に対する肯定的な感じ方

—小学校高学年児童—

池山和子・上久保絵美*

(2002年10月15日 受理)

A Child's Good Feeling about its Own Home

—In the Case of 5th and 6th Children—

IKEYAMA Kazuko, KAMIKUBO Emi

要 約

The purpose of this study was to investigate children's feelings about home, and how a child gets its good or bad feelings about its own home. The methods used were a questionnaire survey of children in upper classes at two elementary schools in Kagoshima-city. The questionnaire sheets were collected from 350 children (178 boys, and 171 girls). The collection ratio was 98.0%.

The results of this questionnaire survey indicated that:(1) The mothers were more influential in bringing up their children than other members of their families. (2)In the boys there was a tendency that boys were getting more independence from their families than girls were. (3)Of the children 13.5% who bad feelings about their own home. There was no significant difference in this between boys and girls. The children who had bad feelings about their home had poor concern with their families' member, and they also had poorer communication with their families in comparison with the children who had good feelings about their home. The children with good feelings had a stronger drive to communicate with their families.

* ジャストミート・コーポレーション

はじめに

子どもの健全な育ちにとって、子どもを支えるものとしての家庭・家族の存在は不可欠である。近年、子どもに対し家庭の機能が十分果たされていないのではないかとの問題が話題に挙がることが多い。子どもたちの起こす大きな社会問題に関して、中心に存在する子どもの育ちの過程を子どもの視点に立ちながら遡ってみると、保護者の意図や努力と別に、家庭ということばによって従来イメージされてきた暖かさや共感性、安らぎ、といったものに欠けていたと考えられることが指摘されてきている¹⁾。同時に、社会全般に家族相互の絆が薄くなってきていることを危惧する声や、しつけやけじめなど従来家庭が果たしてきた教育力の低下を問題にする声も聞かれる。子どもには判断の及ばないこととして子ども自身の将来の幸福へ向けて手遅れにならないうちにその道筋を整える責任も親にはあるのではないかといった考え方から、時には自主性を損なうほどに子どもの生活や行動に指示干渉を強めている保護者の存在も聞かれる。

子どもの成長と発達の中のどの時期においても、より広く世界を広げつつある子どもの生活の拠点として家庭の果たしている機能は必要であり、その機能を十分果たす家庭のあり方が求められる²⁾。成長・発達の土台としての乳幼児期の母子関係の重要性については古典的な研究からその後の事例研究や霊長類による実験、子どもや母親の観察などを含めて多くの研究によって確かめられてきており、その認識は日本においてはかなり母親を中心として広がってきているように感じられる³⁾。乳幼児期の体験と人間関係はその後の生活を基本的に方向づけると考えられるが、その後の成長過程の中のどの時期においても親子関係のあり方を変え、よりよいものにしていく可能性は常に存在していると考えられる。

小学校高学年は、思春期の入り口にさしかかりつつある年齢段階であり、家族と子どもの関係もそれまでの時期のあり方とは異なったものに変化していかざるを得ない過渡的な時期であると考えられる。この時期の子どもたちの家庭や親、社会などに関する考え方は、これまでもいくつかの調査がみられる⁴⁻⁷⁾。しかし子どもの生活の拠点としての家庭の機能について考察を積み上げていくことは、社会が変化しつつある中で今後も意義の大きいことと考える。本報告は、小学校高学年児童が自らの家庭について特に情緒的な側面についてどのように感じているか、また、具体的に良い家族関係へ向けて役立つことを目指して、その感じ方に影響している要因を探ろうとするものである。

方法

鹿児島市内2つの小学校の高学年児童を対象に、質問紙による留置き調査を行った。

- 1) 調査対象：鹿児島市内のやや中心から離れた比較的新しい住宅地域と市の中心に近く古くから

の住宅、商業地域とをそれぞれ学区としている小学校2校の5、6年生児童。調査時点で2校合わせて全高学年在籍児童数は357名であった。

- 2) 調査期間：平成13年9～10月
- 3) 調査手続き：各小学校を通じて質問紙を配布、回収した。
- 4) 質問紙の内容：①家族構成員、②家族との日常的な具体的関わりの様子、③気持の在り方や家族との交流、④現在の自分の家庭に関する感じ方などについて、選択肢を用意して回答を求めた。

結果と考察

1) 対象児の属性

児童については全体で350名の質問紙を回収した。回収率は98.0%であった。対象の属性と、性別、学年別の家族構成員の様子を、表1と表2に示す。学年、性別による家族構成員の差はみられ

表1 調査対象児

	A小学校		B小学校		計		
	人数	%	人数	%	人数	%	
5年	男児	44	45.4	40	54.1	84	49.1
	女児	53	54.6	34	45.9	87	50.9
	小計	97	49.7	74	47.7	171	48.7
6年	男児	51	52.1	43	53.1	94	52.5
	女児	46	46.9	38	46.9	84	46.9
	不明	1	1.0	0	0.0	1	0.6
	小計	98	50.3	81	52.3	179	51.1
小計	男児	95	48.7	83	53.5	178	50.8
	女児	99	50.8	72	46.5	171	48.9
	不明	1	0.0	0	0.0	1	0.3
計	195	55.7	155	44.3	350	100.0	

表2 性別および学年別と家族構成員

家族構成員	性別				学年				計	
	男児 実数	%	女児 実数	%	5年 人数	%	6年 人数	%	人数	%
母親	175	98.3	167	97.7	169	98.8	173	97.2	342	98.0
父親	159	89.3	154	90.1	153	89.5	160	89.9	313	89.7
兄	59	33.1	55	32.2	62	36.3	52	29.2	114	32.7
姉	56	31.6	61	35.7	59	34.7	58	32.6	117	33.5
弟	50	28.2	54	31.6	46	27.1	58	32.6	104	29.8
妹	57	32.4	49	28.7	52	30.6	54	30.5	106	30.4
祖父	17	9.6	11	6.4	17	10.0	11	6.2	28	8.0
祖母	20	11.4	19	11.1	23	13.6	16	9.0	39	11.2
その他	4	2.3	3	1.8	3	1.8	4	2.2	7	2.0
計	178	51.0	171	49.0	171	49.0	178	51.0	349	100.0

N.A.=1

なかった。父親の単身赴任の場合も、ここでは現在一緒に住んでいない者に入っている。母親の就労や父親の職業などについては尋ねなかったが、夕食を一緒に食べるのは、母親305名全体の87.1%、父親165名47.1%である。対象児童のうち「一人で食べる」と回答した者は14名4.0%であった。

2) 日常的な家族との具体的な関わりと、今自分のいる家庭についての感じ方

日常的な家族との具体的な関わりの様子を表3に示す。14項目のそれぞれに最も当てはまる人を家族の中から一人のみ選択するよう求めた。以下の9項目すなわち「夜遅くまで起きていると注意する人」「がんばったりできるようになったことをほめる人」ともに67.0%、「朝起こす人」「落ち込んでいると気にしてくれる人」「悪いことをすると叱る人」「話し相手となる人」までが半数を超え、さらに「部屋を掃除や整頓する人」「よく相談する人」「やさしい人」について、「母親」の選択が他の家族員に比べ多い。児童によって家族構成が異なるので、各家族構成員総数中の選択された割合を人数の右欄に示した。この割合からみた場合でも「母親」の選択される割合が「夜遅くまで起きていると注意する人」「がんばったりできるようになったことをほめる人」「朝起こす人」「落ち込んでいると気にしてくれる人」「悪いことをすると叱る人」「話し相手となる人」「部屋を掃除や整頓する人」「よく相談する人」の8項目において他の家族構成員を抑え最も高い。父親が選択された項目順をみると、「こわい人」45.0%、「悪いことをすると叱る人」「たよりになる人」の割合がともに42.8%で高く、次に「やさしい人」「夜遅くまで起きていると注意する人」「がんばったりできるようになったことをほめる人」「遊んでくれる人」「話しにくい人」と続く。「自分でする」あるいは「いない」の選択は、「話がしにくい人」62.6%「自分の部屋の掃除や整

表3 家族と児童との日常的な具体的な関わり

	母親 人数 %	父親 人数 %	兄 人数 %	姉 人数 %	弟 人数 %	妹 人数 %	祖父 人数 %	祖母 人数 %	その他 人数 %	自分またはいない 人数 %	回答者数計 人数 %
夜遅くまで起きていると注意する人	229 67.0	73 23.3	3 2.6	5 4.3	0 0.0	0 0.0	4 14.3	2 5.1	0 0.0	33 9.4	349
%	65.6	20.9	0.9	1.4	0.0	0.0	1.1	0.6	0.0	9.5	100.0
がんばったりできるようになったことをほめる人	229 67.0	70 22.4	4 3.5	3 2.6	1 1.0	0 0.0	7 25.0	11 28.2	0 0.0	24 6.9	349
%	65.6	20.1	1.1	0.9	0.3	0.0	2.0	3.2	0.0	6.9	100.0
朝起こす人	228 66.7	20 6.4	1 0.9	3 2.6	0 0.0	1 0.9	1 3.6	5 12.8	0 0.0	90 25.7	349
%	65.3	5.7	0.3	0.9	0.0	65.3	0.3	1.4	0.0	25.8	100.0
落ち込んでいると気にしてくれる人	211 61.7	21 6.7	12 10.5	11 9.4	4 3.8	7 6.6	3 10.7	8 20.5	1 14.3	69 19.7	347
%	60.8	6.1	3.5	3.2	1.2	2.0	0.9	2.3	0.3	19.9	100.0
悪いことをすると叱る人	193 56.4	134 42.8	4 3.5	4 3.4	0 0.0	0 0.0	1 3.6	3 7.7	0 0.0	9 2.6	348
%	55.5	38.5	1.1	1.1	0.0	0.0	0.3	0.9	0.0	2.6	100.0
話し相手となる人	171 50.0	27 8.6	26 22.8	30 25.6	22 21.2	19 17.9	2 7.1	9 23.1	1 14.3	43 12.3	349
%	49.0	7.7	7.4	8.6	6.3	5.4	0.6	2.6	0.3	12.3	100.0
部屋を掃除や整頓する人	168 49.1	2 0.6	2 1.8	4 3.4	0 0.0	1 0.9	3 10.7	5 12.8	1 14.3	163 46.6	349
%	48.1	0.6	0.6	1.1	0.0	0.3	0.9	1.4	0.3	46.7	100.0
よく相談する人	163 47.7	16 5.1	12 10.5	21 17.9	6 5.8	4 3.8	0 0.0	4 10.3	2 28.6	119 34.0	347
%	47.0	4.6	3.5	6.1	1.7	1.2	0.0	1.2	0.6	34.3	100.0
やさしい人	158 46.2	77 24.6	19 16.7	19 16.2	11 10.6	2 1.9	5 17.9	23 59.0	2 28.6	32 9.1	348
%	45.4	22.1	5.5	5.5	3.2	0.6	1.4	6.6	0.6	9.2	100.0
たよりになる人	138 40.4	134 42.8	18 15.8	11 9.4	4 3.8	5 4.7	4 14.3	2 5.1	2 28.6	30 8.6	348
%	39.7	38.5	5.2	3.2	1.1	1.4	1.1	0.6	0.6	8.6	100.0
成績が悪いと怒る人	130 38.0	51 16.3	5 4.4	2 1.7	0 0.0	0 0.0	1 3.6	2 5.1	0 0.0	156 44.6	347
%	37.5	14.7	1.4	0.6	0.0	0.0	0.3	0.6	0.0	45.0	100.0
こわい人	84 24.6	141 45.0	18 15.8	13 11.1	2 1.9	0 0.0	3 10.7	2 5.1	0 0.0	86 24.6	349
%	24.1	40.4	5.2	3.7	0.6	0.0	0.9	0.6	0.0	24.6	100.0
遊んでくれる人	19 5.6	65 20.8	62 54.4	42 35.9	50 48.1	41 38.7	2 7.1	0 0.0	1 14.3	66 18.9	348
%	5.5	18.7	17.8	12.1	14.4	11.8	0.6	0.0	0.3	19.0	100.0
話をしにくい人	7 2.0	58 18.5	26 22.8	16 13.7	4 3.8	6 5.7	5 17.9	7 17.9	0 0.0	219 62.6	348
%	2.0	16.7	7.5	4.6	1.1	1.7	1.4	2.0	0.0	62.9	100.0
各家族構成員総数	342 100.0	313 100.0	114 100.0	117 100.0	104 100.0	106 100.0	28 100.0	39 100.0	7 100.0	350 100.0	

注)各項目ごと 右欄%=各構成員総数中% 下欄%=各項目回答者総数中%

頓」46.6%が最も高いが、「成績が悪いと怒る人」「よく相談をする人」「朝おこす人」「こわい人」の選択が20%を超え、また、「落ち込んでいると気にしてくれる人」が「いない」も全体の2割弱が選択している。「こわい人」と「やさしい人」について父親と母親の割合を比べると、従来の父親はこわく母親はやさしいというイメージと重なる割合となっているが、実際の生活の中では「注意したり」「叱ったり」する人として母親の関わりも大きいことをうかがわせる。そのほかの家族については、「遊んでくれる人」としては、きょうだいが多く、祖父母については今回の調査では同居している者の数が多くないが、「がんばったりできるようになったことをほめる人」の役を果たしている者が比較的多い。これらは児童の感じ方としての選択であるが、従来の父親・母親イメージは多少残っているものの、実際には生活の規範を示す役も含め、母親が子どもとの直接的な関わりで果たしている役割は大きいと考えられる。

3) 今の自分の家庭についての感じ方

子どもたちにとって自分の所属している「家庭」とはどういうところと今感じているのか、19の

表4 性別と今の自分の家庭についての感じ方

感じ方	全体% (N=343)	そう感じる		有意差
		性別	人数 %	
楽しい	65.9	男児	106 61.3	
		女児	120 70.6	
自分を守ってくれる	58.0	男児	92 53.2	
		女児	107 62.9	
大切にされている	57.7	男児	93 53.8	
		女児	105 61.8	
無くてはならない	54.8	男児	92 53.2	
		女児	96 56.5	
安らぎを感じる	43.7	男児	67 38.7	
		女児	83 48.8	
気をつかわなくてすむ	42.0	男児	52 30.1 ***	
		女児	92 54.1	
言いたいことが言える	38.8	男児	64 37.0	
		女児	69 40.6	
助け合って生きる	38.5	男児	60 34.7	
		女児	72 42.4	
素直な気持ちでいられる	35.9	男児	59 34.1	
		女児	64 37.6	
自分が家族の役に たつ	31.2	男児	51 29.5	
		女児	56 32.9	
認められている	28.6	男児	43 24.9	
		女児	55 32.4	
言いたいことが言えない	14.0	男児	26 15.0	
		女児	22 12.9	
唯なんとなくいる	9.0	男児	15 8.7	
		女児	16 9.4	
いらいらする	5.5	男児	11 6.4	
		女児	8 4.7	
きゆうくつ	5.0	男児	10 5.8	
		女児	7 4.1	
無くて困らない	4.4	男児	11 6.4	
		女児	4 2.4	
面白くない	3.2	男児	6 3.5	
		女児	5 2.9	
うっとうしい	2.9	男児	6 3.5	
		女児	4 2.4	
緊張する	2.9	男児	9 5.2 *	
		女児	1 0.6	

男子N=173, 女子N=170

* p<0.05 ***p<0.001

項目を挙げ、当てはまると感じているものをいくつでも選択を求めた。その結果を表4に示す。最も選択が多かったのは「楽しいところ」65.9%で、以下「自分を守ってくれるところ」58.0%、「大切にされていると感じるところ」57.7%、「無くてはならない大切なところ」54.8%と続き、肯定的な感じ方の選択が上位に上がり、否定的な感じ方の選択は、最も高い項目が「言いたいことが言えないところ」14%で、以下「ただなんとなくいるところ」からすべて10%以下の選択となっ

表5 数量化Ⅲ類による各軸の固有値・寄与率・相関係数
-説明変数：今の家庭の感じ方

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第1軸	0.5465	17.89%	17.89%	0.7393
第2軸	0.4738	15.51%	33.39%	0.6884
第3軸	0.2646	8.66%	42.05%	0.5144
第4軸	0.2508	8.21%	50.26%	0.5008
第5軸	0.1973	6.46%	56.72%	0.4442
第6軸	0.1796	5.88%	62.60%	0.4238
第7軸	0.1487	4.87%	67.46%	0.3856
第8軸	0.1347	4.41%	71.87%	0.3670
第9軸	0.1259	4.12%	75.99%	0.3548
第10軸	0.1094	3.58%	79.57%	0.3308

表6 今の家庭の感じ方数量化Ⅲ類サンプルスコアによる
クラスター各群の特徴づけ

群	クラスター	人数	第Ⅰ軸	第Ⅱ軸	第Ⅲ軸	第Ⅳ軸
肯定	1	296	-	(-)	(-)	(-)
否定	2	4	+	+	-	+
否定	3	2	-	+	-	-
否定	4	8	+	+	+	+
否定	5	7	+	-	-	-
否定	6	24	(-)	+	(+)	(-)
否定	7	1	+	+	+	+

注) ()は特徴がきわだっていないことを示す

表7 「今の家庭の感じ方」による数量化Ⅲ類・第Ⅰ～Ⅳ各軸のスコアによる順

第Ⅰ軸 (17.89%)	第Ⅱ軸 (15.51%)	第Ⅲ軸 (8.66%)	第Ⅳ軸 (8.21%)	
無くてよいところ	うっとうしいところ	緊張するところ	唯何となくいるところ	+
緊張するところ	きゆうくつ	いらいらするところ	緊張するところ	↑
うっとうしいところ	面白くない	言いたいことがいえない	楽しいところ	
いらいらするところ	いらいらするところ	自分が役に立つところ	安らぎを感じる	
唯何となくいるところ	言いたいことがいえない	楽しいところ	助け合っている	
言いたいことがいえない	唯何となくいるところ	自分を守ってくれる	無くてはならない	
きゆうくつ	緊張するところ	素直な気持でいられる	大切にされていると感じる	
面白くない	認められる	認められる	認められる	
自分が役に立つところ	自分が役に立つところ	助け合っている	自分を守ってくれる	
楽しいところ	楽しいところ	大切にされていると感じる	素直な気持でいられる	
大切にされていると感じる	自分を守ってくれる	無くてはならない	言いたいことが言える	
認められる	気をつかわなくて良い	言いたいことが言える	気をつかわなくて良い	
自分を守ってくれる	大切にされていると感じる	気をつかわなくて良い	自分が役に立つところ	
気をつかわなくて良い	無くてはならない	安らぎを感じる	言いたいことがいえない	
無くてはならない	助け合っている	うっとうしいところ	無くてよいところ	
助け合っている	安らぎを感じる	無くてよいところ	きゆうくつ	
言いたいことが言える	素直な気持でいられる	きゆうくつ	いらいらするところ	
安らぎを感じる	言いたいことが言える	面白くない	面白くない	
素直な気持でいられる	無くてよいところ	唯何となくいるところ	うっとうしいところ	-

ている。性別による差がみられたのは、「気をつかわなくてすむ」が女兒で高く、「緊張するところ」は選択数自体が最少10であるが、ここでは男児で高くなっている。

家庭の感じ方についてグループ化するため、数量化Ⅲ類にかけたが各軸の寄与率が低く、表5に示すように10軸までで80%に達していない。とりあえず各サンプルスコアによってクラスター分析（K-mean法）にかけ7つのクラスターに分けた。7つのクラスターは、各軸のスコアの様子から、表6のようにほぼ特徴づけられた。各軸の現している要素として表7から、Ⅰ～Ⅳ軸をそれぞれ、「否定的—肯定的」、「苦—楽」、「動—静」、「軽い—重い」と解釈した。できるだけグループ人数を近づけるため、クラスター2からクラスター7までのグループを一つの群として、表6から、クラスター1を、家庭を「肯定的」に感じている群296名（86.5%）、クラスター1から7までを合わせた群を「否定的」に家庭を感じている群46名（13.5%）として、大きく2群に分けた。性別と学年別の、家庭の感じ方群構成比は、表8に示すように差がなかった。

以下、家族との関わりの傾向を、性別と家族の感じ方別を分析軸として、クロス集計と χ^2 検定によって検討を行う。

4) 落ち着いた、楽な気持ちになれることと家族の同席

表8 性別・学年別と今の家庭の感じ方

		単位:%	
		肯定的	否定的
男児	(n=173)	83.8	16.2
女児	(n=169)	89.3	10.7
5年	(n=170)	88.2	11.8
6年	(n=172)	84.9	15.1
計	(n=342)	86.5	13.5

表9 性別と家族と一緒に楽な気持ちになれるか

		単位:%			
家族と同席状況	性別	とても楽	まあ楽	楽になれない	有意差
家族と同じ部屋	男児 (n=158)	46.2	44.9	8.9	*
	女児 (n=164)	60.4	31.7	7.9	
小計	(n=322)	53.4	38.2	8.4	
一人で家にいる	男児 (n=142)	29.6	41.5	28.9	***
	女児 (n=162)	18.5	27.2	54.3	
小計	(n=304)	23.7	33.9	42.4	
家族はいるが自分の部屋に一人	男児 (n=143)	30.1	50.3	19.6	
	女児 (n=162)	37.7	43.2	19.1	
小計	(n=305)	34.1	46.6	19.3	
自分の好きなところで一人でいる	男児 (n=149)	54.4	34.9	10.7	
	女児 (n=161)	42.9	42.2	14.9	
小計	(n=310)	48.4	38.7	12.9	

* p<0.05 ***p<0.001

家族と一緒にいることで、落ち着けたり楽な気持ちになれるか、あるいは楽になれないか、家族の存在の異なる4つの状況を挙げ、それぞれについて「とても楽な気持ちになれる」「まあ楽な気持ちになれる」「楽な気持ちになれない」の3件から選択を求めた。その結果を、性別の傾向とともに表9

表10 今の家庭の感じ方別と家族と一緒にいて楽な気持ちになれるか

		単位: %			
家族との同席状況	感じ方	とても楽 になれる	まあ楽に なれる	楽に なれない	有意差
家族と同じ部屋	肯定的 (n=276)	59.1	34.8	6.2	***
	否定的 (n=39)	17.9	59.0	23.1	
一人で家にいる	肯定的 (n=257)	20.6	32.7	46.7	**
	否定的 (n=40)	42.5	37.5	20.0	
家の人はいるが 自分の部屋に一人	肯定的 (n=264)	34.1	47.7	18.2	
	否定的 (n=34)	29.4	44.1	26.5	
自分の好きなところ で一人である	肯定的 (n=263)	45.2	41.1	13.7	*
	否定的 (n=40)	67.5	27.5	5.0	

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

表11 性別と家族は自分の気持ちがどれくらいわかっているか

		単位: %			
家族構成員	性別	よくわかる	まあわかる	わからない	有意差
母親	男児 (n=170)	68.2	28.2	3.5	
	女児 (n=165)	68.5	29.1	2.4	
小計 (n=335)		68.4	28.7	3.0	
父親	男児 (n=162)	43.2	46.9	9.9	
	女児 (n=152)	31.6	55.9	12.5	
小計 (n=314)		37.6	51.3	11.1	
兄	男児 (n=61)	24.6	47.5	27.9	
	女児 (n=54)	16.7	44.4	38.9	
小計 (n=115)		20.9	46.1	33.0	
姉	男児 (n=54)	16.7	53.7	29.6	**
	女児 (n=58)	43.1	37.9	19.0	
小計 (n=112)		30.4	45.4	24.1	
弟	男児 (n=48)	10.4	52.1	37.5	
	女児 (n=54)	5.6	46.3	48.1	
小計 (n=102)		7.8	49.0	43.1	
妹	男児 (n=54)	11.1	46.3	42.6	
	女児 (n=48)	14.6	47.9	37.5	
小計 (n=102)		12.7	47.1	40.2	
祖父	男児 (n=26)	34.6	42.3	23.1	
	女児 (n=16)	37.5	50.0	12.5	
小計 (n=42)		35.7	45.2	19.0	
祖母	男児 (n=33)	48.5	33.3	18.2	
	女児 (n=28)	39.3	42.9	17.9	
小計 (n=61)		44.3	37.7	18.0	

** p<0.01

に、家庭の感じ方別の結果を表10に示す。家族と一緒にの部屋にいることで「楽になれない」を選択した者は全体で1割に満たないが、男児と女児で異なる傾向がみられる。一人で家にいる場合についても性別によって有意な差がみられる。女児では家族と同室していることでより楽になり、一人で家にいるときは楽になれない様子がみられる一方、男児では家族と同じ部屋にいても一人で家においても「まあ楽な気持ちになれる」を選択する者が多い。男児の方がいくらか家族から独立している傾向がみられる。今の家庭の感じ方別では、肯定的な感じ方をしている群（以下肯定群とする）と、否定的な感じ方をしている群（以下否定群とする）とでは、家族と一緒にの部屋にいる時、一人で部屋にいる時、自分の好きなおとこに一人でいる時の3状況で有意な差が見られる。肯定群では家族と同室することで「楽になれない」者は6.2%であるが、否定群では23.1%である。一人で家にいる場合、肯定群では「楽になれない」を選択した者が46.7%であるが否定群では「とても楽になれる」が42.51%となっている。一人で好きなおとこにいる時については、肯定群でも45.2%が「とても楽な気持ちになれる」を選択しているが否定群では67.5%が選択しており、「楽になれない」が肯定群で13.7%であるのに対して否定群は5.0%である。否定群は家族との間に気詰まりな感じを抱いている可能性が感じられる。

5) 家族の一人一人はどのくらい気持ちをわかってきていると感じているか

それぞれの家族構成員について、気持ちを「よくわかってきている」と思うか、「まあまあわかってきている」あるいは「ほとんどわかってこない」の3件から選択を求めた。性別の結果と合わせ示した結果と、家庭の感じ方別の結果を表11と表12に示す。全体として「よくわかってきている」「まあわかってきている」合わせると、母親では97.1%、父親では88.9%である。きょうだい、祖父母など両親以外の家族に比べ、親はより「よくわかっている」と感じている。性

表12 今の家庭の感じ方別と家族は自分の気持ちをわかっているか

家族 構成員	感じ方別		単位:%		
			よく わかる	まあ わかる	わから ない
母親	肯定的	(n=288)	71.9	26.4	1.7 ***
	否定的	(n=40)	45.0	45.0	10.0
父親	肯定的	(n=267)	40.4	50.2	9.4 **
	否定的	(n=41)	19.5	58.5	22.0
兄	肯定的	(n=98)	22.4	43.9	33.7
	否定的	(n=14)	7.1	57.1	35.7
姉	肯定的	(n=94)	33.0	42.6	24.4
	否定的	(n=14)	21.4	57.1	21.4
弟	肯定的	(n=85)	9.4	49.4	9.4
	否定的	(n=16)	0.0	43.8	56.3
妹	肯定的	(n=87)	14.9	47.1	37.9
	否定的	(n=14)	0.0	50.0	50.0
祖父	肯定的	(n=36)	38.9	44.4	16.7
	否定的	(n=5)	20.0	40.0	40.0
祖母	肯定的	(n=55)	43.3	36.4	20.0
	否定的	(n=6)	50.0	50.0	0.0

** p<0.01 *** p<0.001

別では姉に関してのみ有意差がみられ、女兒は姉を「よくわかってきている」と考えている傾向が高い。家庭への感じ方別では、母親と父親に関して有意差がみられる。否定群では、肯定群に比べ母親についても父親についても共に「わかってきている」が低く、「わかってくれない」が高くなっている。きょうだい、祖父母については人数が少ないため一般的な傾向として解釈することには無理があるが、否定群・肯定群で明らかな差はみられない。

6) 家族との関わりで寂しさを感じる状況

家族との関わりで寂しさを感じる可能性の高い状況を7項目挙げ、そのそれぞれの状況での感じ方について「とても寂しい」「少し寂しい」「全く寂しくない」のいずれかを選択するよう求めた。その結果を性別の傾向と合わせ表13に示す。家庭の感じ方別については、否定群の人数が少ないので「少し寂しい」と「とても寂しい」を合わせ「寂しい」とし、「寂しくない」「寂しい」の2項目としてクロス集計を行った。その結果を表14に示す。また、「その他」を用意した上で、寂しいと感じる状況は「特に無い」との選択肢を用意した。その結果について、表15に示す。性別では、すべての状況で有意な差がみられた。ここに挙げたどの状況でも女兒が「とても寂しい」と感じ、男児の選択では寂しさを感じる度合いが女兒より低い。家族とのかかわりで寂しさを感じることは

表 13 性別と家族との関わりで寂しさを感じる時

状況	性別	n	単位: %			有意差
			とても寂しい	少し寂しい	全く寂しくない	
家に一人である時	男児	(n=117)	13.7	44.4	41.9	***
	女兒	(n=144)	31.3	44.4	24.3	
	小計	(n=261)	23.4	44.4	32.2	
一人で食事している時	男児	(n=109)	19.3	30.3	50.5	**
	女兒	(n=136)	36.0	33.1	30.9	
	小計	(n=245)	28.6	31.8	39.6	
忙しくて相手をしてくれない時	男児	(n=108)	8.3	42.6	49.1	**
	女兒	(n=142)	15.5	55.6	28.9	
	小計	(n=250)	12.4	50.0	37.6	
他の家族で手一杯で構ってくれない時	男児	(n=107)	12.1	38.3	49.5	***
	女兒	(n=137)	39.4	32.1	29.5	
	小計	(n=244)	27.5	34.8	37.7	
他の人と比べて認めてくれない時	男児	(n=108)	18.5	43.5	38.0	***
	女兒	(n=139)	48.2	33.8	18.0	
	小計	(n=247)	35.2	38.1	26.7	
がんばったのにほめてくれない時	男児	(n=109)	33.9	42.2	23.9	**
	女兒	(n=138)	53.6	29.0	17.4	
	小計	(n=247)	44.9	34.8	20.2	
気持や考えをわかってくれない時	男児	(n=109)	18.3	45.0	36.7	***
	女兒	(n=144)	45.8	44.4	9.7	
	小計	(n=253)	34.0	44.7	21.3	

** p<0.01 ***p<0.001

「特にない」の選択では逆に男児が高く、女児が低くなっている。家庭の感じ方別の結果をみると、有意な差のみられた状況項目は、「家に一人である時」「忙しくて相手をしてくれない時」「他の家族のことで手一杯でかまってくれない時」「考えや気持ちをわかってくれない時」で、いずれも否定群で「寂しい」と感ずる割合が肯定群に比べて低い。「特に無い」の選択は逆に否定群で高い。対象とした小学校高学年は、年齢的に家族から独立しようとする発達段階にさしかかっていると考えられるが、特に男児において、その傾向をこの結果は反映していると考えられる。一方家庭に関する感じ方の別による差については、前節で述べた、両親に対し「わかってきている」という感じが低い点と考え合わせると、関係が悪く始めから期待していないなどの心情を持っている可能性が考えられる。さらに深く調べる必要がある。同時に、有意差のない、特に「他の人と比べて自分を認めてくれない時」については、肯定群と否定群で選択割合がかなり近く、家族のこのような言動は、家庭に距離を置いている子どもにとってもさらに心を傷つける可能性が高いことを

表 14 今の家庭の感じ方別と家族との関わりで寂しさを感じる時

状況	感じ方	単位%		有意差
		寂しい	寂しくない	
家に一人である時	肯定的 (n=227)	70.5	29.5	*
	否定的 (n=30)	50.0	50.0	
一人で食事する時	肯定的 (n=214)	62.6	37.4	
	否定的 (n=27)	48.1	51.9	
忙しくて相手をして くれない時	肯定的 (n=217)	65.9	34.1	**
	否定的 (n=29)	37.9	62.1	
他の家族で手一杯 でかまってくれない時	肯定的 (n=212)	65.6	34.4	**
	否定的 (n=28)	39.3	60.7	
他の人と比べて 認めてくれない時	肯定的 (n=214)	73.4	26.6	
	否定的 (n=29)	75.9	24.1	
がんばったのに ほめてくれない時	肯定的 (n=214)	81.8	18.2	
	否定的 (n=29)	69.0	31.0	
気持や考えを わかってくれない時	肯定的 (n=218)	81.2	18.8	*
	否定的 (n=31)	64.5	35.5	

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

表 15 家族との関わりで寂しいことが「特に無い」と「ある」
—性別と今の家庭の感じ方別

	性別	人数	単位%		有意差
			特に無い	ある	
性	男児	(n=177)	32.8	67.2	***
	女児	(n=171)	14.0	86.0	
今の家庭の 感じ方別	肯定的	(n=295)	20.7	79.3	*
	否定的	(n=46)	37.0	63.0	
全体		(n=349)	23.5	76.5	

* p<0.05 *** p<0.001

示唆していると考えられる。

7) 家族員への要望

家族員への要望として11項目を挙げ、それぞれについて求めたい家族を選択するよう求めた。きょうだい、祖父母は人数が少ないので、要望の相手を「母親へ」「父親へ」と、きょうだいと祖父母を合わせ、「その他の家族へ」とした。性別による結果を表16に示す。この質問については、家庭の感じ方別では有意な差がみられなかった。またこの質問に対する選択肢として「その他」と「特に無い」を用意したが、いずれも有意な差がみられなかった。性別の傾向をみると、女兒では、「帰宅時に家に居て迎えてくれる」(85.7%) ことや「遊んだり相手をしてくれる」(33.0%) ことを「母親」に要望している。一方「構い過ぎないでほしい」「子ども扱いしないでほしい」については、男児は「母親」へ(それぞれ46.9%, 40.2%), 女兒では「父親」へ(それぞれ37.7%, 48.6%)の要望が高くなっている。

8) 日常的な家族との具体的な関わりと、性別、家庭への感じ方別による傾向

2) 節で述べた、日常生活における具体的な関わりが家族構成員の中でどのようになされているかについて、性別と家庭への感じ方別にまとめた結果を表17と表18に示す。これまでみてきたように、親の存在が大きいことと、人数をある程度まとめるため、性別では、家族を「父親・母親」「その他の家族」「自分またはいない」の3グループにまとめ、家庭への感じ方別では「家族の中に該当する者がいる」「いない」の2グループにまとめた上で、クロス集計を行った。性別で有意な差のみられた項目は、19項目中「落ち込んでいると気にしてくれる人」「話し相手となる人」

表 16 性別と家族の一人一人への要望

要望	性別	単位:%			有意差
		母親へ	父親へ	親以外の 家族へ	
学校から帰宅した時家にいて	男児 (n=98)	68.4	11.2	20.4	**
もっと遊んだり話したりして	女児 (n=119)	85.7	7.6	6.7	
構い過ぎないで	男児 (n=100)	17.0	39.0	44.0	*
子ども扱いしないで	女児 (n=100)	33.0	30.0	37.0	
もっと可愛がって	男児 (n=81)	46.9	18.5	34.6	*
他の人と比べないで	女児 (n=61)	31.1	37.7	31.1	
習い事や塾を無理強いしないで	男児 (n=87)	40.2	23.0	36.8	**
口うるさくいわないで	女児 (n=70)	22.9	48.6	28.6	
できることに手出ししないで	男児 (n=46)	34.8	41.3	23.9	
気持ちをわかって	女児 (n=47)	51.1	23.4	25.5	
悩んでいた寂しさを気づいて	男児 (n=89)	62.9	16.9	20.2	
	女児 (n=100)	67.0	21.0	12.0	
口うるさくいわないで	男児 (n=52)	75.0	17.3	7.7	
口うるさくいわないで	女児 (n=49)	73.5	20.4	6.1	
口うるさくいわないで	男児 (n=89)	65.2	20.2	14.6	
口うるさくいわないで	女児 (n=85)	64.7	25.9	9.4	
口うるさくいわないで	男児 (n=93)	50.5	17.2	32.3	
口うるさくいわないで	女児 (n=73)	52.1	24.7	23.3	
口うるさくいわないで	男児 (n=88)	33.0	35.2	31.8	
口うるさくいわないで	女児 (n=87)	39.1	36.8	24.1	
口うるさくいわないで	男児 (n=61)	41.0	34.4	24.6	
口うるさくいわないで	女児 (n=55)	60.0	23.6	16.4	

表 17 性別と家族との日常的な具体的関わり

具体的関わりの項目	性別	単位:%			有意差
		母親あるいは父親	その他の(親以外の)家族	自分又はいない	
夜遅くまで起きていると注意する人	男児 (n=177)	84.2	4.0	11.9	
	女児 (n=171)	88.9	4.0	7.0	
がんばりをほめる人	男児 (n=177)	83.1	7.9	9.0	
	女児 (n=171)	88.7	7.0	4.7	
朝起こす人	男児 (n=177)	72.3	1.7	26.0	
	女児 (n=171)	69.6	4.7	25.7	
落ち込んでいると気にしてくれる人	男児 (n=176)	60.8	14.2	25.0 *	
	女児 (n=170)	73.5	12.4	14.1	
悪いことをすると叱る人	男児 (n=176)	92.6	3.4	4.0	
	女児 (n=171)	95.3	3.5	1.2	
話し相手となる人	男児 (n=177)	51.4	29.9	18.6 **	
	女児 (n=171)	62.6	31.6	5.8	
部屋を掃除や整頓する人	男児 (n=177)	52.0	4.5	43.5	
	女児 (n=171)	45.6	4.7	49.7	
よく相談する人	男児 (n=175)	42.3	9.7	48.0 ***	
	女児 (n=171)	61.4	18.7	19.9	
やさしい人	男児 (n=177)	68.9	18.6	12.4 *	
	女児 (n=170)	65.9	28.2	5.9	
たよりになる人	男児 (n=177)	75.1	14.7	10.2	
	女児 (n=170)	81.2	11.8	7.1	
成績が悪いと怒る人	男児 (n=175)	52.0	2.3	45.7	
	女児 (n=171)	52.0	3.5	44.4	
こわい人	男児 (n=177)	60.5	12.4	27.1	
	女児 (n=171)	69.0	8.8	22.2	
遊んでくれる人	男児 (n=177)	24.9	56.5	18.6	
	女児 (n=170)	23.5	57.1	19.4	
話をしにくい人	男児 (n=176)	17.6	16.5	65.9	
	女児 (n=171)	19.9	19.9	60.2	

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

表 18 今の家庭への感じ方別と家族との日常的な具体的関わり

	感じ方別	単位:%		有意差
		家族にいる	いない	
夜遅くまで起きていると注意する人	肯定的	92.2	7.8 **	
	否定的	78.3	21.7	
がんばりをほめる人	肯定的	94.9	6.7 **	
	否定的	82.6	17.4	
朝起こす人	肯定的	75.3	24.7	
	否定的	65.2	34.8	
落ち込んでいると気にしてくれる人	肯定的	84.6	15.4 ***	
	否定的	54.3	45.7	
悪いことをすると叱る人	肯定的	98.3	1.7 *	
	否定的	91.3	8.7	
話し相手となる人	肯定的	91.5	8.5 ***	
	否定的	65.2	34.8	
部屋を掃除や整頓する人	肯定的	53.9	46.1	
	否定的	56.5	43.5	
よく相談する人	肯定的	70.0	30.0 ***	
	否定的	43.5	56.5	
やさしい人	肯定的	91.9	8.1	
	否定的	84.4	15.6	
たよりになる人	肯定的	93.2	6.8 **	
	否定的	80.4	19.6	
成績が悪いと怒る人	肯定的	57.0	43.0	
	否定的	47.8	52.2	
こわい人	肯定的	73.6	26.4 *	
	否定的	89.1	10.9	
遊んでくれる人	肯定的	84.0	16.0 ***	
	否定的	60.9	39.1	
話をしにくい人	肯定的	34.7	65.3 *	
	否定的	52.2	47.8	

肯定群N=295, 否定群N=46 * p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

「よく相談する人」「やさしい人」で、女兒では「落ち込んでいると気にしてくれる人」「話し相手となる人」「よく相談する人」として「父親あるいは母親」が選択されており、男児では「いない」の選択が多くなっている。これまでみてきたように男児では家庭から独立しようとする傾向や友達関係へ向かっている傾向の反映とも考えられるが、「落ち込んでいると気にしてくれる人」が女兒に比べ「いない」結果については今後も調べていく必要があると考える。家庭への感じ方別では「夜遅くまで起きていると注意する人」「がんばりをほめる人」「落ち込んでいると気にしてくれる人」「悪いことをすると叱る人」「話し相手となる人」「よく相談する人」「たよりになる人」「こわい人」「遊んでくれる人」「話をしにくい人」で有意な差がみられる。否定群では「こわい人」「話をしにくい人」で「家族にいる」が高く、一方「夜遅くまで起きていると注意する人」「がんばりをほめる人」「落ち込んでいると気にしてくれる人」「話し相手となる人」「よく相談する人」「話をしにくい人」「悪いことをすると叱る人」「話し相手となる人」「よく相談する人」「たよりになる人」「遊んでくれる人」では家族に「いない」が高くなっている。両群で家族構成員の人数に差はないので、否定群では、児童と日常的な家族との関わりが薄く、その一方児童にとって「こわい人」「話にくい人」が存在している家庭となっている傾向があると考えられる。

9) 家族とのコミュニケーション

表 19 話相手と話す時間が足りているか
—性別と今の家庭の感じ方別

			単位%		
			足りない	まあ満足	充分満足
			有意差		
性別	男児	(n=174)	19.5	37.4	43.1
	女兒	(n=167)	13.2	35.9	50.9
今の家庭の感じ方別	肯定的	(n=290)	14.1	37.2	48.6 *
	否定的	(n=45)	31.1	31.1	37.8
全体		(n=342)	16.4	36.5	47.1

* p<0.05

表 20 家族との関わりで寂しい時、それを家族に言うか
—性別と今の家庭の感じ方別

			単位%		
			家族に言う	言わない	有意差
性別	男児	(n=175)	24.6	75.4 *	
	女兒	(n=169)	37.9	62.1	
今の家庭の感じ方別	肯定的	(n=291)	33.7	66.3 *	
	否定的	(n=46)	15.2	84.8	
全体		(n=345)	31.0	69.0	

* p<0.05

家族とのより具体的なコミュニケーションの様子に関わる質問として、家族内の「話し相手となる人」と会話をする時間は充分あるかどうか、家族との関わりで寂しいと感じた時それを家族に言うか否か、寂しいという気持ちを家族は気づいていると思うか否か、家族への要望を家族へ言ったことがあるか否かについて、それぞれ性別と家庭への感じ方別にクロス集計を行った。表19～表22にその結果を示す。性別に有意な差のみられた質問は、家族との関わりで寂しいと感じた時それを家族に言うか否かの結果のみで、男児では「言わない」が高い。家庭への感じ方別では、上記すべての質問に関して有意な差がみられた。否定群では、家族内の話し相手と会話する時間が足りないと感じている。また、家族との関わりで寂しいと感じたときそれを家族に言わず、また家族への要望も言わない傾向がある。さらに家族との関わりで自分が寂しいと感じたことを家族は気づいていないと思っている。否定群では、家族とのコミュニケーションの機会も少なく、児童自身も自分の気持ちを家族へ伝えることに消極的であり、家族は自分の気持ちに気づかないと思っており、これは4)節で述べた親が自分の気持ちを「わかってくれている」と感じている結果と一致する。

このような結果となっている現状について、きっかけあるいは原因が子どもの側に帰するものか、親に帰するものかはわからない。しかし各家庭が子どもにとって肯定的な感じ方を得るためには、言い古された基本である、子どもとの気持ちや考えの交流について再度確認する必要がある。子どもがせがまないと親は親の仕事や都合を先立てる傾向があり、親子関係がうまくいっている場合はそ

表 21 家族との関わりで寂しい時家族は気づいていると思うか
－性別と今の家庭の感じ方別

		単位:%		
		気づいて	気づいてい	
		いると思う	ないと思う	有意差
性別	男児 (n=62)	79.0	21.0	
	女児 (n=79)	67.1	32.9	
今の家庭の感じ方別	肯定的 (n=126)	78.6	21.4	***
	否定的 (n=14)	21.4	78.6	
全体 (n=142)		72.5	27.5	

*** p<0.001

表 22 家族への要望を言ったことがあるか
－性別と今の家庭の感じ方別

		単位:%		
		言ったこと		
		がある	ない	有意差
性別	男児 (n=152)	56.6	43.4	
	女児 (n=158)	64.6	35.4	
今の家庭の感じ方	肯定的 (n=263)	63.9	36.1	**
	否定的 (n=40)	40.0	60.0	
全体 (n=311)		60.5	39.5	

** p<0.01

れで良いとも言える。しかし親の考えと子どもの感じ方がずれている場合、親子関係を円滑な方向へ変えていく上で親が子どもへ目を向け、気持をわかろうと試みてみることで、子どもが積極的に気持や考えを親や家族へ伝えようとするのを励ますことを試みることは意義が大きいと考えられる。

まとめ

上記の結果および考察をまとめると、以下の点を挙げるができる。

- ① 現代の家庭において、母親に育児の責任が集中してきておりそのことが育児不安の増大に拍車をかける要因のひとつであるといわれているが、子どもの感じ方として、従来の日常的な世話と気持を受け入れる役割と同時に規範を示す役も含め、母親の関わりと重みが実際に大きくなっていると考えられる。
- ② 小学校高学年において、男児においては、家族から独立しようとする傾向がみられる。女児においては家族内において特に母親との間で安定しようとする傾向があり、家族への対し方に性別によって違いがみられる。しかし家庭についての感じ方についてはあまり大きくは異なっておらず、基本的に肯定的な感じ方をしている者が9割に近い。
- ③ 家族と、気持の交流ができていると感じている児童では、今自分の所属している家庭に関して肯定的な感じ方をしている。一方、気持が通じないと感じている児童では、自ら気持を伝えようとする傾向も低く、家庭に関して否定的な感じ方をしている。小学校高学年では、親が他の家族と別に、保護者が子どもの気持や考えをわかろうとすることは、男児、女児ともに意義が大きく、子どもが各家庭に肯定的な感情を持つことにつながると考えられる。

今回は児童の回答によって児童の感じ方に関する考察を行ったが、同じ調査時に対象児童の保護者に対しても質問紙調査を行っているので、今後その結果を整理・分析し児童の調査結果と対照して考察する予定である。

謝辞

今回の調査に快く、また熱心にご協力くださいました二つの小学校の、関係の先生、校長先生、教頭先生各担任の先生、そしてそれぞれの質問にていねいに回答して下さった5年生と6年生の児童の皆様方に、心より感謝を申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 伊藤芳朗 「少年 A」の告白 小学館 1999
- 2) 日本家政学会編 子どもの発達と家庭生活 朝倉書店 1988
- 3) 先間敏子 家庭における子育てを中心とした養育能力の向上 第Ⅱ章 妊産婦の育児に関する知識と人格特性 鹿児島大学教育学研究科平成13年度修士論文 (未刊行)
- 4) 教育基礎情報調査会編 教育アンケート収録年鑑第2巻家庭・しつけ 主婦の科学 1986
- 5) 厚生省児童家庭局企画課監 ビジュアル子どもと家庭 全国社会福祉協議会 1997
- 6) 総務庁青少年対策本部編 低年齢少年の価値観等に関する調査 大蔵省印刷局 2000
- 7) 指定都市教育研究所連盟編 子どもがとらえた教育環境 東洋館 2000
- 8) 丹羽洋子 今どき子育て事情：2000人の母親インタビューから ミネルバ書房 1999
- 9) 日本女子社会教育会 平成5年度・6年度文部省委託事業：家庭教育に関する国際比較調査報告書—子どもと家庭生活についての調査 1995